

野島金八郎について

— 花袋・風葉研究のための一資料 —

岡 保 生

田山花袋の『東京の三十年』（大正六）の「再び東京へ」という章の中に次のような一節がある。

私は英語を麹町の番町あたりの小さな饗舎に習ふ傍、内務省の官吏をしてゐた舊藩士の息子の許に種々な話を聞きに行つた。その子息は今の高等商業のある護持院原にあつた大學豫備門に通つてゐたが、英語は殊によく出来て、學校でも秀才の名が高かつた。（中略）その内務省の官吏の息子に名を野島金八郎と言つて、途中で學校を止してから、轉訶不遇、多くは支那や外國に官職に轉々して、副領事までは立身してそして去年死んで了つたが、其時分、かれの父は内務省の向うの官舎に住んでゐた。私は暇さへあると、常に其處へ出かけて行つた。

これは明治一九年夏、花袋が數え年一六歳のときのことだ、かれの兄實彌登が東大の資料編纂係に奉職したのを契機とし、一家

をあげて東京に住むこととなつたが、その上京後の生活を語つてゐる中の一部分を引いたものである。

花袋はこの野島について、

年少の私はこの人のハイカラな文學好きな竹を割つたやうなサキイ氣分にどれほど感化されたか知れなかつた。

と述べ、その交友ぶりをいろいろと具體的にこの章の中で描いてゐる。その一、二をひろうと、「文學者、藝術家が何と言つても一番すぐれた高尚な事業なんだからな。」といい、「西洋にはいくらでもえらい文學者がある。すぐれた小説がある。これからの文學をやる奴は、何でも外國のものを讀まなければ駄目だ。」と花袋に教えたのは、野島であつた。ビイコンスフィールド卿の小説とか、『佳人之奇遇』や『雪中梅』を紹介したのも野島であつた。またかれはこういう文學面だけでなく、田舎から出てきたばかりの花袋に「東京で名高い店の食物」を喰べさせて、都市生活ではじめて味わえる味覺の愉しさを體驗させることもあつた。

花袋の側からすれば、この英語に熟達した才氣あふれるばかり

の都會青年が、自分をみちびいて未知の世界へと招じてくれる好個の指導者と感じられたことであらう。このような二人の交友は花袋によれば「私の十六、十七の二年」のころ、すなわち明治一九、二〇年ごろ見られたのであつた。

『東京の三十年』では、その他に二ヵ所野島の出でくるところがある。ひとつは「新しい文學の急先鋒」という章で、花袋に法律と文學とをやれとすすめたN氏という名で出てくる。(N氏だから野島の父ではないかとも思われようが、文中にその青年であることが明示されているし、このとき野島はすでに學生ではなかつたのである。)もうひとつ、「ゾラの小説」では、N氏あるいはN君として登場している。ここでは花袋が野島の藏書を無断で持出して、野島の父親から叱責され「言ふに言はれない悲哀を感じた」思ひ出を語っている。これはいつごろの出来事であつたかといへば、その章前後の記述から推して、明治二三年ぐらゐという見當がつく。従來の花袋年譜で、この年野島に英語を學ぶという項が見えるのも一應背けるのである。しかし、前述したように、かれらの交友はすでにその四年も前に結ばれていたのだし、むしろ逆にこの年あたりから、右に述べた事件を契機として、二人の友情はようやくすらいで行き、花袋の足は野島家の方から遠ざかつて、上野圖書館へ向うこととなるのだから、相當な補正が必要であらう。

ところで一つの疑問がある。それは、今までわれわれは『東京の三十年』を手がかりとして、花袋と野島との交渉を追つてきたけれども、明治一九、二〇年ごろと同二三年ごろの敘述があつて

その中間の明治二一、二年という時期は空白のままになつてゐることである。もつともそれは他に書くべき事項が多かつたからふれなかつたまでであつて、二人の交渉は一九年以來かわることなく續いていたのだと推測されないこともない。が、こういう推測は、しばしば事實に裏切られることがあるものである。われわれは意外な方面から、ちようどその時分の野島の消息を発見する。「意外な方面」というのは、花袋とは生地もちがえば經歷もちがひ、全く無關係に文學者への道を歩んだ小栗風葉の著作をさす。すなわち創作『ぐうたら女』(明治四一、四『中央公論』)と己が回想をしるした『出郷、放浪、出世作』(同、六『文章世界』)とがこれである。

まず「人名なぞを違へただけで、大抵は事實である。」とことわつてゐる『ぐうたら女』を見ると、「島田先生」という英語の教師が次のように紹介されている。

島田先生は何でも群馬邊の生れで、大學の豫備門を中途で歇めて、東京でブラブラ遊んでゐたのを、今度の校長が續續きの所から英語の教師に呼寄せたのださうだ。若い元氣の好い青年で、私達生徒を能く山へ海へ遊びに連れて行つては、隅田川のボートレースだの、飛鳥山の運動會だのと、東京の學生生活を面白さうに話してくれた。

そうして「新しい文明の潮が一度に押寄せたやうな」いわゆる鹿鳴館時代の東京の有様をいつも熱心に語つてくれたという。この島田先生によつて、「作文が得意だつた私」(すなわち風葉)は、「お前は文學を遣れ。文學と云ふものは天才の事業で、文明

の花だ。：不朽の事業だ。」といつて勵まされる。これが「私」の文學者となる動機であつた。風葉はこの作のなかで、こう回想している。

この島田先生は、一體どんな人であつたろうか。『ぐうたら女』によると、「先生は其後又東京へ舞還つて、新聞記者にもなれば著述家にもなる、日露戦争の時には軍事探偵にまでなつて、今では外國の公使館に居る」となつており、また別のところで、主人公上京後のある時期を描いた一節中に、「頼りに思ふ島田先生は、外交官試験に及第して朝鮮へ赴任して居た。」と書かれている。この小説からはこれだけしかわからないが、これを補うのが『出郷、放浪、出世作』である。同文中に、

もつとも、島田先生とは『ぐうたら女』中の假名で、實は野島先生といふ。

と明記されている。なおつづけて、この先生は早くから書齋にゾラのナナなどを置いていたほどで外國文學に精通していたこと、田山花袋がかれによつて強く文藝を鼓吹されたこと等が示され、「此先生の故郷は田山君と同郷の館林であるから、昵懇でもあつたのだらう」と決定的な事實が書かれている。さきの『東京の三十年』と對照して、この先生が野島金八郎であることは、もはや疑う餘地はあるまい。

そこでこの時期がいつであつたかということであるが、これは風葉の母校、愛知縣半田小學校の『學校沿革誌』によつて、明治二十一年から翌二十二年へかけてのことであつたと判明する。當時風葉は高等小學在學中であり、かれが野島から深く感化されたこと

は、右の著作等のはか、遺族の談話によつても明らかである。

以上述べたところにより、さきに野島、花袋の交渉を記した中で、空白となつていた中間の明治二一、二年という時期は、花袋との交友が中断され、かわつて半田において風葉を育成していたという事實が明らかになつたと思う。

このように野島は、明治二〇年前後において、花袋、風葉を指導育成したという點で重要な意味をもつ人物であるが、不幸にも今日その名は殆んど忘れられている。本稿はきわめて不十分なものではあるが、微力の及ぶかぎり調査した結果をまとめたものである。

二

野島金八郎は慶應三年二月六日、群馬縣館林に生れた。父は好行、山下家から養子入籍した人である。母はかね。金八郎は長男であるが、一人の姉むらがあつた。野島家はもと館林秋元藩に仕えた士族である。秋元侯は幕末の弘化三年山形から轉じて、この上州館林藩主となつたから、その家臣達はみなこれに隨行した。野島家もその例外ではない。金八郎の祖父、林八もこの年から館林に居住することとなつた。林八は柔術にすぐれていたという。父の好行、また母のかねについては花袋の『東京の三十年』に「昔風のよく働くあいその好い母親、嚴格な頑固な背の高い父親」というように描かれている。

しかし、金八郎における文學的な血統という點からは、だれよりも伯父（好行の兄）、山下雪窓の存在を重視せねばならない。雪

し、そのはげしい練習かもとで肋膜炎にかかつて臥床する身となつていた。これが原因となつて、豫備門を退學するのである。やがて病氣もなおり、既に學窓を去つていたかれは、明治二年春思い立つて東京を離れ、愛知縣へ赴くのであつた。それは、高橋貫一氏によると、たまたまこの春名古屋に萬國博覽會が開催されその出品目録を作製するのに英文も必要なので、その翻譯係として野島が働くこととなつたためだという。ただし私はこの年名古屋でそういう博覽會の開かれたことを耳にしていない。大方の御示教を仰ぎたいと思う。とにかく、この尾張行の目的なり理由なりを明記した文獻は見あたらない。風葉の『ぐうたら女』の記載は遺族の話によれば、信をおきがたい。

尾張へ赴こうとする野島に、花袋は惜別の情を漢詩に托して餞けとした。それは明治二年四月七日發行「顓才新誌」五六一號所載の次の詩である。(柳田泉教授の御示教による)

丈夫何說淚痕濃

笑蹴海門浪萬重

直到遠州洋上望

水粘天處見芙蓉

こうして名古屋に着いた後の野島は、その職がごく一時的な短期間のものだつたから、じきに失職することとなつたが、在職のあいだは収入がかなり多く、若い野島は酒色に濫費するようになつたという。(高橋氏談)後年の野島が酒豪だつたことは、近親者がみな認めている。さて失職後、野島は知多半島の半田村へ、小學校教員として着任することとなつた。

この學校は、愛知縣知多郡高等小學校衣浦學校といい、在籍生徒二一六名、現在の半田市、當時半田村の舊郡役所を校舍としていた。野島は准訓導の資格で、英語を教えた。半田小學校の『學校沿革誌 信の巻』によると、「職員 准訓導」の項に

明治二十一年就職

明治二十二年七月三十一日退職

英語
教師 野 嶋 金 八 郎

と記されている。在職期間はわずかに一年でしかなかったが、この間に風葉を啓發したのであつた。風葉實弟である小栗半左衛門氏の談話によると、野島は學校でナショナルリーダーを三まで講義していたという。また野島は半田在住中、萬三商店に下宿していて、町を散歩するのを楽しみとしていたが、當時の半田では他に見られないような都會風の、洗練された身なりであつたという。(小栗氏による)

二二年夏、學校を退職して歸京した野島の動靜はなお明確とはいえない。その英語に長じていたところから、通譯等をしていたともいわれ、風葉が述べているように錦城中學の講師もしていたのであらうと思われる。風葉の記述から考へて、それは大體明治二三、四年ごろであらうと推定される。

次いで野島は「經世新報」の記者となつてゐる。明治二十四秋から翌二五年へかけての時期がそれに該當する。同社で十二圓の月俸をもらつてゐたと自身で述べてゐる。かれの仕事はおもに外國電報等の翻譯であつたらしい。そして、そう長くは在社しなかつたようである。

※この「經世新報」は、東大の明治新聞雜誌文庫に、かなりの缺號をふくみながらも、所藏されている。同文庫所藏のそれによれば、この新聞は明治二四年九月九日（水）第一號を出し、發行所 東京市京橋區加賀町九 經世新報社、發行兼印刷人 北村三郎、編集人 長島萬里とある。北村が紫山と號して、社長地位にあつたようである。その第八九號は明治二五年一月三日（日）の發行で、新年號にあたるが、その廣告欄に

編集多忙拜趨する能はず乍略儀紙上を以て新年恭賀仕候也

として、北村三郎以下十三人の名前が並んでいる。ところがこの中に野島は見當らない。ただし末尾からかぞえて三人めに「飯島金八郎」というのがある。これが野島ではないかと思われる。なお最初から三人めに石川器三という名があるがこれは後でふれる野島の書翰集の中にも「同紙主筆記者」としてあらわれる人物である。石川は「米國文學士法學士」で本紙に署名入の論說等を掲げているが、野島の署名執筆した記事は、明治文庫所藏分では、見ることができなかった。無署名の記事の中で、執筆者として野島がふさわしいと思われるものがないでもないが、野島の「著述」なるものが殆んど知られない今日、それも臆測にとどまるのである。

その後の野島の生活も、英語にすぐれていたところから翻譯等によつて衣食の道を講じていたであろうと推定されるだけで、たしかなことはわからない。高橋氏によれば、野島にこの頃ものし

たと考えられるかなり大きな翻譯の原稿があつたという。しかし、いまでは散逸して見られないのである。

やがて日清役となるが、その二八年に野島は外交官試験に合格外務省に採用されて領事館書記生として朝鮮の釜山に勤務することとなつた。このころはすでに野島家も相當窮迫していたらしい。この年以後の野島については、遺族所藏の野島書簡集「惲艸」によるのが便宜であろう。以下の記述は、主としてこれにもとづくのである。

※「惲艸」は、野島が甥、渡邊清太郎に宛てた書簡三〇通と父好行に宛てた書簡一五通、あわせて四五通の書簡を収めている。これを編纂し、「惲艸」と命名したのは清太郎である。表紙に題名と「明治四拾年十月集之」という記載がある。これらの書簡は一枚ずつ各ページにはりつけてあり、封筒はない。しかも、その書簡はいずれも發信の年月日が完全には記載されていないので、その年月を推定しなければならない。けれども、幸いに大部分のものが推定可能である。そうしてその結果、この書簡集が、明治二八年から三四年まで、野島の任地に即していうと、釜山、杭州、上海、ハーグの在任時代にわたつての書簡を收録していることが判明する。ただし一々の書簡は必ずしも年月順ではない。いま、便宜上各書簡を收載順に書簡1、書簡2等と呼び、以下の記述に使用することとする。

野島が釜山領事館にいたのは、二八年から二九年にかけてで、書簡1（一二月一四、五日附）で「本月一日ヨリ十日迄ハ蕭後始

メて自から會計事務ノ始末を着け候爲メ大に多忙(すべて原文のまま、以下同じ)とかかいてゐること等から、釜山着任は二八年の秋もかなり深まつてからであらうと思われる。年末年始をはさみ「酒と藝者ノ間ニ醒醉」したりすることもあつたが、書簡1の末尾に

寒風の身にしむ毎に父母の如何におはすと思はるゝ哉
俗夫卅歳生レテ始メテ如此!

と書いているのもわかるように、この邊の書簡にはおおむね遠く故國の父母を懷う金八郎の子としてのなげきが流露している。それには無理からぬ理由があつた。というのは、母かねの病がようやく重くなつていたからである。二九年の四、五月の交、野島は歸國して病床の母を見舞つたが、それが生前の母に會つた最後の機會だつたようで、やがてこの年七月六日かねは永眠したのである。野島が悲報を得て歸つたときは、すでに空しくつたが、その當時の模様を近親者は今なお記憶している。

その後まもなく野島は中國の杭州領事館に轉動を命ぜられた。

杭州には、この二九年から三一年まで、かぞえ年三〇から三二歳にいたるまで在動している。ここは釜山とちがつて暖かく、景色も美しいうえに、領事館員も少なくて人々の往來もあまりなかつたので、野島は心の安らぎを得たものとおぼしく、この時期に書かれた書簡はみな長文で、文辭にもその工夫のあとが見える。一二の例を示すと、

三千里外ノ秋色孤窓前ノ梧桐ノ葉ヲ染メ月夜寂寥四隣萬鎖止ムノ頃起キテハ家書ヲ讀ミ寐テハ故郷ヲ思ヒ遂ニ去テ庭前ヲ

散スレハ地下ノ落葉踐テ聲アリ

というのが、書簡24の書き出しである。この書簡は、日曜の好天を利用して、西湖に近い雷峰塔にのぼつたことを清太郎に報じたものである。また書簡2に

暮色ノ蒼然タルニ追ハレテ再ヒ黃塵萬丈ノ城内ニ歸リ青燈ノ下又タ讀ミ又タ想ヒ半宵眠ニ就ケハ夢魂切リニ神田橋邊ニ追遙ス何等ノ胸中ハ御身ノ想像ニ俟ツ

と、家郷忘れがたい思いを述べているが、おなじ書簡のなかにやはり西湖への散策をしるし、「堤上ノ柳」と「兩岸ノ紅葉」とを對して秋色の深くなり行こうとする西湖一帯の風光を寫している。當時、野島の愛誦していたのは蘇東坡の詩であり、なかでもその弟子由を懷うて詠んだ作であつた。これはおそらく、東坡を野島自身、子由を清太郎と、それぞれなぞらえていたためと思われるが、書簡15、28にはその詩を引用してもいる。とにかく、こうした漢詩的な教養が、書簡をとおしてうかがわれることは、見のがせぬ事實のひとつといつてよい。これとやや關連するものとして、書簡6(一二月八日附。明治三〇年と推定)の中で、清太郎に『百家說林』の三、四、五の三冊を送つてほしいと言送つてゐることを附言しておく。

明治三一年の末に、野島は杭州を去り、上海の領事館に轉動した。そして三四年のはじめまで同地に在任している。三二歳から三五歳までの時期である。この上海在任中、義和團の變が勃發しその緊張した空氣に包まれている上海の模様を書簡10は傳えている。(三三年七月六日發信と推定)翌三四年早々、野島は志村す

ずと結婚した。時にすずは二四歳であつた。が、野島は直ちにオランダ公使館勤務を命ぜられて、ハーグに行くこととなつた。すずは東京の留守宅にいて、病床にあつた好行の看護をするのがつとめであつた。妻というのは名目上のことにすぎず、とおく異郷に旅立つ野島自身のかわりに、女性の介抱の手を好行が必要としていたから、すずと結婚したように考えられる。しかし好行はこの年六月歿するのであつた。

さて、野島はこの二月二三日、新橋から横濱に向かい、日本郵船河内丸に塔乗、オランダへの航路をたどることとなつた。書簡30によれば、田山花袋や小栗風葉らもかれを見送りに來ている。この船旅の様子は、途中の港々から授じたかれの書簡によつて、くわしく知られる。そうして野島は、マルセーユ上陸後、パリを経て、五月二日ハーグに到着し、オランダ領事館員としての生活をはじめるのであるが、「惲艸」所收書簡のうち最後のものと推定されるのは、同年七月一〇日附の書簡45で、父好行にあてたものである。しかし、好行はすでにその一月近くもまえの六月一日に歿していた。この書簡の

御困却被遊候事トハ萬承知仕居候得共遠隔ノ地ノ爲メ何事モ思フニ任セス御諒察被下度候……時下御橋養奉祈候
という文字は、ことにいたましい感じを與える。

その後の野島についてざつと素描すると次のようになる。
かれは明治三十九年までオランダに在勤、四〇年轉じてイギリス大使館勤務となつた。四一年、首席書記生に昇進、四二年から四四年にかけてフランス大使館に勤務し、ときの大使栗野慎一郎に

知遇を得たという。かくて在歐十年、四四年久方ぶりに歸國して外務省電信課に入り、四五年副領事となつた。これよりさき四二年五月、すずと協議離婚して、單身で外務省官舎に住んでいたが大正元年八月、三恵由哲の四女、壽と結婚して家庭をもつた。野島四六歳、壽は三四歳であつた。大正三年、臺灣總督府翻譯官となり、臺北に赴任。總督府外事課長であつた。間もなく健康を害して、内地に歸り療養したが空しく、翌大正四年一月二日、東京神田表神保町一〇番地で、その生涯を閉じた。享年四九歳。病名は胃癌である。同一四日、谷中阪町一乗寺で葬儀執行、遺骸を谷中墓地、乙十號八側に葬つた。法名、霽月院子治日涉居士。

※なお野島の死亡月日は、館林市役所の戸籍、谷中靈園事務所の記録、死去當時の各新聞の死亡廣告、また柳田教授から御示教頂いた「官報」第七四九號の記載等、どれも一月十三日となつてゐる。ただし時間はみなちがつてゐる。右の一月二日という記述は、かれの墓碑に刻銘されてゐるところにものとづく。

花袋がいうように、野島の一生は「輓輒不遇」であつたろう。野島自身、書簡25（杭州在勤時代のもの）に

我レモイツマテ如斯小役人ノ仕事ハ當年同學ノ諸朋友ニ對シ
テモ實ニ耻ツカシキ至リナレトモ是レモ身カラ出タ鑑ナリト
アキラメ申スヘク候

と悲痛な述懐をしてゐる。しかし、青年期において、花袋、風葉等を指導啓發したという事蹟は、十分に評價されてよいであらう。次ぎにその點を少しく考えてみたい。

花袋が野島から何を學び、そしてそれをどう消化して自分の血肉としていつたか。花袋文學を形成するうえに、野島はどんな役割をはたしたか。

このことを考えるまえに、花袋と野島とが人間的に深い結びつきをもっていたことを取上げねばならぬと思う。かれらは、同じ館林を故郷として、同じ士族階級という出身に屬し、同じような境遇、職歴を経たところのそれぞれの父をもつていたうえ、今やともに同じ東京で遊學する身の上におかれていた。そしてかれら同士だけで親友になつてゐるというのではなく、田山、野島の兩家が親交をもちつづけていたのだから、普通の先輩後輩という程度では律せられない、きわめて深いつながりが、かれらの間にあつたことはいふまでもない。

けれども、私のいいたいのはそのことではなく、花袋、野島というこの二人の青少年の性格、素質に關してのことである。

少年期に感傷の日をもつことは、世上必ずしもめずらしいとはいえないが、少年花袋にとくにその傾向が著しかったことは、よく知られてゐる。この浪漫的感傷性が、花袋文學の基調となつていつたと考えることも可能であらう。ところで野島はいえ、これまた感傷的な多情多感の青年であつたことが『東京の三十年』に記されている。遺族の談話に徴しても、後年の野島は一見豪放磊落のようだが、根はこまかな、情味のふかい人柄であつたといふことが知られる。要するにこの二人の青年は、ともに理知的と

いおうよりも、感情的な面で、際立つた特色をもつていたのである。しかも二人は、文藝愛好の趣味をひとしくしており、花袋は野島の氣分に感化されたことが大きいというが、もともと氣分的に兩者は共通するものを多く持つていたといふべきである。

こういう性格的、また氣分的な面で、兩者がほぼ同じような傾向にあつたということが、ますます二人の友情を濃密にし、相互の思想とか人生觀の上にも、交流を強めて行つたであらうと豫想される。

さて、花袋が野島から學んだ直接、かつ有形的なものとしては第一に英語および外國文學の知識があげられよう。これは『東京三十年』にくわしく出ている（語學についてはあまり書いていないが、英語に熟達していた野島から學んだことは自明の理といえる）。

第二には、それに連關して外國文學書（英譯）を自由に讀ませてもらつたことである。『東京の三十年』の「ゾラの小説」に書かれてゐる事實は決して虚構ではなく、高橋實一氏が野島の直話として私に傳えて下さつたところでもあつた。第三に、以上を總括するかたちにもなるが、花袋の文學觀を變化させたことである。つまり、今までの花袋は主として和漢文學をみずからの文學的支柱としていたが、野島はそれを新しく外國文學（歐米文學）的なものに移行すべきことを指導したという點である。もちろん當時の文學界の風潮から、晚かれ早かれ花袋もそうした變化をたどることは必然であつたと考えられるけれども、野島の指導により、それが早められまたより確實な方向へと向けられていつたこ

とは、見おとせないと思う。このことは花袋文學の形成途上において、最も重要なポイントのひとつといえる。

つぎに無形的な面で、花袋自身も述べてはいないが、私はいまひとつ野島が、無意識のうちにこそ、花袋に與えた大切な事柄があると思う。それは花袋に文學者として世に立つていく自信というか、決意のようなものを持たせたということである。花袋はそのころ「顕才新誌」等に投稿して、一應少年漢詩人としてみるべく、かなり強い文學的志向があつたことは事實であるが、年若いだけになお將來への進路を決めかねていたことも『東京の三十年』にあるとおりだと思われる。だからこそ、野島に助言を求めたりしてもいる（「新しい文學の急先鋒」）。このとき野島は、法律と文學をやれと花袋にすすめているが、花袋は結局その中の文學で身を立てることとなつた。花袋にそういう踏みきりを決意させたのは、野島という存在があつたからではなかつたか。私はそのように考える。

『東京の三十年』に、野島にかんしてこういう記述がある。

かれには文學的氣分が非常にあつたにも拘らず、また絶えず英語の小説や歴史や傳記を繙讀してゐるにも拘らず、漢學の力がないので、文章が旨く書けなかつた。その方にかけては、兎に角漢詩や歌などを作る私にいつも一目を置いてゐた。『僕も、もう少し文章が書けると、文學をやるんだがな。』

…』

野島は「私にいつも一目を置いてゐた」と語る花袋のこの回想は、言いかえれば當時の花袋が野島に對しある優越感を抱いてい

たという告白にはかならぬのではないか。この優越感が花袋を支える自信に成長し、それが花袋をしてあえて文學への道にふみ切らせたのであらうと思う。こういうと、花袋の野島に對する優越感をあまりにも過大評價しているというそしりを免れないであらう。けれども私は、花袋の資性と當時の境遇を考え、こういうことができると思うのである。さきにもいつたとおり、もともと感傷的な少年花袋は、早く父を亡い、貧苦の中に育ち、満足できる學校教育も受けていなかった。「いかに社會が美しく派手に、且羨しく妬しく私の眼に映つたであらうか。何處に行つても、何を聞いても、何を見ても、私の體はすぐ戰へた。」——花袋はこういつている。いくらか誇張はあらうが、事實無根ではあるまい。そして野島とても、やはりこの「社會」の一員であることにかわりはない。否、野島が身近な存在であるだけに、よけい強く劣等感を味わつていたのではなからうか。かれは「好い家庭」に育ち、両親の戀愛を受け、豫備門に學んで自由に英書を讀破している。この野島に對し、ただひとつ自己の優位を誇りうる文藝という一筋、それを生涯かけて生きぬこうとの決意が、いつか花袋の心の中に芽生えてきたと見るのも、全く見當はずれではないであらう。念のためにつけくわえておくが、花袋が野島を「漢學の力がない」と評したのは、野島が漢學に無縁であつたというのではなく、さきにも記したように野島には漢詩文的素養はあつたのであり、にもかかわらずそれがとおり一遍のものに過ぎなかつたから、花袋の優越感が生れたのである。

以上の花袋の自信ということは、單に花袋一個の問題であつて

およそ野島にはかわりないことだけでも、無意識のうちに野島が花袋に與えたひとつの大きな感化ということができよう。

さて、つづいて野島が風葉に與えた感化を考察すべきであるが、これについては不十分ながらかつて別稿にふれたことがあるので省略する。ただ風葉の場合、花袋よりも一その年少であつたこと、野島が恩師という立場であつたこと等を思うと、花袋よりもさらに強く野島の感化を蒙っていることは容易に想像されるであらう。この點で、野島をより重視すべき必要があることを一言しておきたい。

あとがき 本稿の野島略傳を書く上で、柳田泉先生をはじめ、野島志郎、高橋貫一、高橋きよ、陸井清三、細川邦夫各氏に懇切な御示教を頂いた。厚く御禮を申し上げます。

三〇、二、二七稿
三二、三、二五改稿

筆者紹介

| | | |
|-------|-------|---------|
| 加藤 諄 | 昭七大文 | 早大教授 |
| 橋本達雄 | 昭卅二二文 | |
| 上坂信男 | 昭廿五大文 | 一文副手 |
| 松本治久 | 昭卅修士 | |
| 國東文麿 | 昭十五大文 | 早大講師 |
| 藤平春男 | 昭十九大文 | 早大講師 |
| 野村富美子 | 昭廿九一文 | 學校圖書編集部 |
| 佐藤泰正 | 昭十五大文 | 梅香女學院教諭 |
| 岡保生 | 昭廿大文 | 明星中 |
| 秋永一枝 | 昭廿六一文 | 二文副手 |
| 大野實之助 | 昭七高師 | 早大教授 |